

Mrs. Dalloway 試論

住本哲子

A Study of *Mrs. Dalloway*

by

Akiko SUMIMOTO

1

処女作 *The Voyage Out* の発表か1915年、遺稿 *Between the Acts* の完成か1941年。まさに Woolf は二大戦にはさまれた不安と混乱の時代に生きた作家であった。¹⁾ 処女作以来あく事なく 'life' を探り求め続けてきた Woolf にとって、すべての作品は 'nine different versions'²⁾ であるともいえよう。日記 (1925. 4. 8) の中で Woolf は 'More and more do I repeat my own version of Montaigne—"It's life that matters."³⁾ と述べているか、これは Woolf の創作態度を裏付けるものと思われる。D. Daiches が 'perhaps the first wholly successful novel'⁴⁾ と評価した *Mrs. Dalloway* (1925) について論ずる前に、評論 "Modern Fiction" についてふれてみなければならぬ。この評論の中で Woolf は Wells, Bennett, Galsworthy 等 Edwardians を非難攻撃し、彼等が固守する従来の小説形式の打破を宣言している。それでは Woolf のいう新しい小説形式は一体どのようなものであるか。"Modern Fiction" の中で Woolf は次のように述べている。

Let us record the atoms as they fall upon the mind in the order in which they fall, let us trace the pattern, however disconnected and incoherent in appearance, which each sight or incident scores upon the consciousness.⁵⁾

心かうけとめる 'an incessant shower of innumerable atoms'⁶⁾ をそのまま写し出すことこそ、小説家としての Woolf の切なる願いであった。*Jacob's Room* (1922) で試みた新しい実験が *Mrs. Dalloway* において始めて成功をおさめるのである。Woolf 自身 'the most satisfactory of my novels'⁷⁾ と述べている *Mrs. Dalloway* は執筆にとりかゝってから完成までには2年半近くもの才月を費しており、このことからこの小説は苦闘の結実といえよう。

Mrs. Dalloway を読む時、われわれは現在の経験と過去の記憶が巧みにない合わされていることに気付く。現在時において過去の出来事をふりかえって考えるのは誰しも日常経験することであり、それ自体は何の変哲もないことである。しかし Woolf はこれを小説の世界に持ってこようとしたのである。'everything is the proper stuff of fiction'⁸⁾ という理論を実践に移したのか *Mrs. Dalloway* であり、また同時にそれは 'an experiment with time'⁹⁾ でもあった。

Mrs. Dalloway の成功の主たる原動力になったものは 'tunnelling process' の発見であると思われる。日記 (1923. 10. 15) の中で Woolf は次のように述べている。

It took me a year's groping to discover what I call my tunnelling process,
by which I tell the past by instalments, as I have need of it. ¹⁰⁾

現在の経験と過去の記憶をとのように入れ替えて、融合させるか。言葉をかえていけば、過去を物語るにはとうすへきか。と Woolf は *Jacob's Room* の完成以来絶えず考えていたのだから、1年間の模索の後に 'tunnelling process' を発見したのである。'tunnel' とは人間の深層意識を暗示しており、'tunnelling process' により過去を物語ることは次第に意識の暗い領域へと沈潜していくことを意味する。

2

Mrs Dalloway は第一次大戦後5年を経た1923年6月半のある水曜日、午前10時頃から夜更けまでの10数時間の間の出来事を、主として女主人公 Clarissa の心理を通して描いたものである。空間的には一つの場所 London に限られている。

Mrs Dalloway の冒頭の頁は 'Mrs. Dalloway said she would buy the flowers herself.' という文章で始まっている。そしてこれより数行先のところでは、52才の平凡な女性 Clarissa は突然18才の少女だった頃を思い出す。

What a lark! What a plunge! For so it had always seemed to her when,
with a little squeak of the hinges, which she could hear now, she had burst
open the French windows and plunged at Bourton into the open air. ¹¹⁾

更にこれより数行先のところでは再び30数年後の現在の時点に戻り、Clarissa が追憶する Bourton でのある場景は30数年後の現在時に連結される。このように冒頭の頁では現在と過去は Clarissa の意識の中で融合している。花を買うという現在の行為と Bourton での過去の記憶をつないているものは何であろうか。もしかしたら 'reverie' と 'reverie' とをつなぐものがあるとするならば、それは D Daiches が指摘した 'for' という語かも知れない。¹²⁾ 接続詞としての 'for' はあとから思いついた理由または説明を述べる時に用いられる。しかし上に引用した文章での 'for' は少し別の要素を持っているように思われる。'What a lark! What a plunge!' と次の 'For' 以下の文章で述べられることの間には30数年間の才月の隔たりがある。にも拘らず Clarissa の意識の中に何の抵抗もなく、われわれが入っていけるのはどうしてか。もう少し例をとってみよう。次の描写は突然訪れた Peter との再会の場面である。

For she was a child throwing bread to the ducks, between her parents, and
at the same time a grown woman coming to her parents who stood by the
lake, holding her life in her arms which, as she neared them, grew larger
and larger in her arms, until it became a whole life... ¹³⁾

'Do you remember the lake?' と Peter に問いかけた後すぐ Clarissa は意識下へと沈潜していく。自分か子供であると同時に大人であるという錯覚を一瞬抱く。'lake' という語を発したとたん、Clarissa は Bourton での子供の頃のことを思い出す。しかしこゝでも 'for' という語は何か大きな意味を持っているように思われる。

最後にもう一つ夜会の場面から例をとってみよう。

... , for, though she loved it and felt it tingle and sting, still these semblances, these triumphs (dear old Peter, for example, thinking her so brilliant), had a hollowness, ...¹⁴⁾

はなやかな夜会の最中 Clarissa は何か空虚を感じる。自分を取り巻く外界、即ち夜会から内的世界に Clarissa は向うのである。ここでも使われている 'for' という語は、先程引用した二つの例同様二つの世界（あるいは二つの 'reverie'）をつなく役割を果しているように思われる。それは多分 'thinker' の接続詞であると同時に、作者 Woolf の側の接続詞でもあろう。

3

Mrs. Dalloway では従来の伝統的技法を打破し、出来事を 'clock time' に従って叙述することをやめ、時間の歩みといわは無関係に発展する登場人物の心の動きを精細に描き出そうと試みているのである。客観的には事実として受けとめられる 'actual event' も、主観的世界では何等意味を持たないと Woolf は考えていた。¹⁵⁾ 'for' という語が *Mrs Dalloway* において非常にしばしば使われていること、そして 'thought' という語の使用頻度が高いことは Woolf が主観的世界、即ち内的世界を捉えようとしていることを示すものと考えられる。

註

- 1) Cf B I Evans, *English Literature Between the Wars* (London, 1949), p. 12.
- 2) Jean Guiguet, *Virginia Woolf and Her Works* (London, 1965), p. 196.
- 3) V Woolf, *A Writer's Diary* (London, 1959), p. 72
- 4) D Daiches, *Virginia Woolf* (Norfolk, 1963), p. 61
- 5) V. Woolf, *The Common Reader I* (London, 1957), p. 190.
- 6) *Ibid* , p. 189.
- 7) *A Writer's Diary*, p. 69.
- 8) *The Common Reader I*, p 194
- 9) B Blackstone, *Virginia Woolf, A Commentary* (New York, 1949), p. 71.
- 10) *A Writer's Diary*, p. 61
- 11) V Woolf, *Mrs Dalloway* (London, 1963), p. 5.
- 12) D Daiches, *Virginia Woolf*, p. 71.
- 13) *Mrs Dalloway*, p. 48.
- 14) *Ibid* , pp. 191-192.
- 15) *A Writer's Diary*, p. 102.